群馬県立太田高等特別支援学校
コーディネート係発行
第４７号　平成３１年 ３月１３日

Co だより

オープンダイアローグ　第３回対話実践の報告会

平成 30 年 12 月 9 日（日）　会場：東京大学本郷キャンパス医学部鉄門記念講堂

オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン（ODNJP）の平成 30 年度 3 回目の主催行事。文化人類学者としてこれまで精神科病院でフィールドワークを行ってきたベイトソン研究者・野村直樹氏と世界の医療団やハウジング・ファーストをとおしてホームレス状態にある人の支援に深く関わってきた精神科医・森川すいめい氏にＯＤの実践とは何かについてそれぞれの考えを聞いた。また、4 組の実践者から、それぞれの取り組みについての話を聞いた（個人情報が多分に含まれるため、詳細は割愛）。

１．『オープンダイアローグの実践とは何か』

語り手：野村直樹氏（文化人類学者／名古屋市立大学大学院特任教授）
森川すいめい氏（精神科医／みどりの杜クリニック院長）
聴き手：矢原隆行氏（社会学者／熊本大学大学院教授）

オープンダイアローグの実践において､最小構成人数は３人であろう｡1 対 1 でも可能と思っていたが、できるだけチームで対応することが大切である。家族療法(ファミリーセラピー)では、支援者が巻き込まれてしまうことがある。参与と観察は同時にできないからである。チームで実践することで、コミュニケーションの現場に参与と観察を同時に持ち込むことができる。言い換えれば、関係と関係を結ぶことができるのである。

聞き手①と聞き手②が聞きたいことを自分勝手に言うと、話がぶった切られてしまう。お互いにリスペクトがないといけない。チームワークが大切なのである。

2 人であると、上下関係ができてしまう。3 名以上であると、水平関係を担保しやすい。斜めにどのように風を通すのか。場が間を生かし、間が場を生かす。老子・第四十二章｢三は万物を生ず｣とあるように 3 人以上で行うことが大切である。

２．演題１『その人が生きている世界を語ることばを私たちはどう聞くのか？～日々の訪問看護での関わりを振り返って』

訪問看護ステーション KAZOC

KAZOC は、医療機関に属さない独立型の訪問看護ステーションである。チームは、看護師、作業療法士、心理士、精神保健福祉士、事務の他職種で構成されているが、医師はいない。ニーズに合った（ニードアダプテッドな）治療の考え方を探求してきた。

心理的連続性が重要である。患者さんを置いてきぼりにしない。その世界を語る言葉を聞き切る。関わり続けることを心がけている。

３．演題２『オープンダイアローグとハウジングファースト』

ゆうりんクリニック

路上生活者の支援を行っている。米国で始まった支援である。特別支援学級や特別支援学校の卒業生でホームレスになっている方も多い。高齢者には、介護認定を取り、介護サービスを受ける方もいる。

３年ほど悪戦苦闘したが、いくらかの手応えと、途方もない挫折、不確かな未来が収穫物であった。正解は、わからないが、とにかく続けてきた。

４．演題３『障害者就労移行支援事業所におけるオープンダイアローグの実践とその効果について』

LITALICO 研究所（株式会社 LITALICO）

LITALICO は「利他利己」から来ている。スタッフ 400 名を抱え、すべてのスタッフに専門性を求めるのは難しい。

障害は社会の側にあるので、障害のない社会を作るには、社会が変わらなければならない。

就労移行支援事業所 LITALICO ワークスでは、筑波大学と共同研究として、通所している利用者本人およびその家族に対して、LITALICO ワークススタッフによるオープンダイアローグ的なミーティングを実践している。就労支援では、本人を中心とした、家族や関係機関が会する拡大ケース会議があるため、そこにオープンダイアローグのアプローチを導入するのである。

利用者は、精神障害・発達障害の方が約８割を占めている。対等な関係を保つため、スタッフは利用者を「メンバーさん」と呼ぶ。メンバーさんとは、定期的にスタッフ 2 名以上で面談をしている。アセスメント→個別計画作成→ケース会議→個別計画の合意→個別計画実施→評価をサイクルとして繰り返していく。

５．演題４『ACTIPS における経験専門家プロジェクトについて』

リカバリーサポートセンターACTIPS

2018 年度よりピアサポートの取ｃ組として、「経験専門家プロジェクト」を開始した。フィンランドでは、精神的もしくは身体的な病気や障害をもつ人が、自分の経験を他者に話す(分かち合う)ためのトレーニングを受けることで、「経験専門家」として、同じような病気、障害、困難をもつ人のピアサポートに携わっている。

2018 年 4 月より試行的に「経験専門家養成講座」を実施している。オープンダイアローグ、リフレクティング、インテンショナル・ピアサポート (IPS)、マインドフルネスストレス低減法を参考にしている。

６．演題５『地域で幻聴と共に生きる男性と関わる支援者チームの未来語りのダイアローグとオープンダイアローグのミックスメソッド事例』

OD トレーニングコース関西チーム

「未来語りのダイアローグ」は、先のことを予想し、未来から現在を振り返るダイアローグアプローチである。支援者がこのままの支援でよいのか悩んでしまったとき、「未来語りのダイアローグ」を行うことで、支援者の不安と懸念を軽減することができた。当事者が語り出したときには、「オープンダイアローグ」に切り替える。「未来語りのダイアローグ」と「オープンダイアローグ」をミックスメソッドとして用いることで、膠着状態の打開に繋がっている。カルテを作る際は、一人称で記している。一人称はこちらに語りかけてくる。

実践のみであるとうまくいかない。会話がうまくいかなくなったときには、対話の練習をする。「聞き切る」、「話し切る」練習をするのである。